

## 方言——全国概観——

藤原与一

昭和三十五・三十六年の「国語学界」の「展望」のために、方言の研究界を展望するとなつて、私は、「全国概観」という課題を与えられた。

これは、他の「東部」以下のことを考えてみるのに、方言の全国状態についての観察・研究を問題にするように、ということかと思ふ。

もう一つ、方言研究の近状を、全国的に概観することも、「全国概観」として考えられないことはない。

## 二

方言研究は、三十五・三十六年において、全国的に見て、躍進をとげたであろうか。躍進をとげたとは言いかねるように思う。まずは、以前のありさまの、継続的な発展と言つてよいのではないかと思ふ。

『方言学講座』（東京堂）の出刊されたことは、方言研究界での、なかなく大きな収穫であった。これで、研究界に、一つのまとめがついたわけでもある。さて今後は、この、全国概観と見られる全体について、内容の精密化・充実につくすことが肝要であろう。

実証研究の高めかたには、どのような方向が考えられるか。近來

は、アメリカの「構造言語学」の影響もかなりいちじるしく、本誌も、47輯には、その特集をこころみている。諸方法は大いに参照し学ぶべきでもある。同時に、私どもは、日本語のために日本語を見なくてはならない。この点で、一つ、考慮すべきことがある。これまでには、日本語のために方言を考えるにしても、とかく、日本語一般というようなものから方言を見る風がよかつた。たとえば副詞にしても、方言の副詞が、「国語の副詞」というようなもの、つまりは、共通語の副詞一般というようなものについての「副詞」文法学から、観測されることが多かつたのである。これでは、どうしても、方言の観察が単純化する。いわゆる感動助詞などにしても、共通語上の感動助詞から方言のそれを観察したのでは、およそ、方言上の感動助詞の実態はつかめない。方言上の事態は、共通語からは、かくだんの複雑なものがある。方言の全国的な諸現象は、たいていのが、共通語のあたまでは思ひおよばぬほどのことであると言へる。私どもは、日本語のために日本語を見ようとして、方言を考えるにあたっては、どうしも、方言そのものに即応しなくてはならない。そのことが、文字どおり着実でなくてはならない。日本語のために、こうして方言から出発することが、じつは、日本語についての、正常な理解のしかたになる。このことをよく自覚するのが、純粋の方言学の立場である。日本語のために日本語を考え、

日本語を見ようとして方言につく時、日本語の性格も構造も、その個性的なものがわかってくる。研究の諸方法を他からわれに適用する場合などは、このような、日本語についての基本的な理解方途と、他からの適用諸方法を、調和させなくてはなるまい。

諸方法の適用以前にたいせつなことは、適用の対象、方言事項、方言事象が、資料として正しくとりあげられていることである。けつきよは、方言調査ということに、話しは帰着する。三十五年三十六年において、方言調査法は、飛躍的に進展せしめられたか。調査の科学的厳密ということは、依然として、今日の重要課題であるように思う。(比較調査の精確化など、論点は多い。)調査事項の拡充のことなどは、まだ、容易には実現されそうもない。

方法上のことを思うにつけても、方言研究は、全国的に見て、一般に、理論への努力がよわいと言えるように思う。理論への努力についても言える。方言の研究が、いかにも事業としておこなわれがちである。せっかく実践しても、それはそれだけの実践にとどまろうとする。理念の輝きがない。これでは、方言研究家は、いつまでも、「国語学」の外にあって、素材論者とどまるだけである。全国的に、方言研究界に、学問意欲の高まることが望まれる。

方言というものを、とらえて、そのものから、そこに、理論をうみ出さなくては、方言をとらえたことにも研究したことにもならないのではないか。

### 三

さて、つきには、方言の全国状態についての観察・研究を問題にしたい。

三十五・三十六年での業績としては、『方言学講座1』(昭36)の「概説」中の諸項目がとりあげられる。

- 1 方言の研究 東条操
- 2 方言学と言語地理学 柴田武
- 3 音韻 榎垣実
- 4 アクセント 平山輝男
- 5 文法 金田一春彦
- 6 語彙 大岩正伸

これらについては、ひとえに、大方の披読をまらしたい。

平山輝男氏は、別に、『全国アクセント辞典』(東京堂昭35)を公表された。これは、全国諸方言アクセントにもわたった、わが国はじめての大「方言アクセント辞典」であり、全編には、理想的なアクセント辞書を目ざしての、さまざまのくふうがこらされている。方言アクセント研究としては、今後、各地方で、この書を参考として、精密正確な調査を実施することが有意義であろう。

雑誌発表では、「言語生活」36年8月に、「日本の方言はなくなるか」がある。これも、「日本の方言」を考えている点では、全国的な見かたのものとして、いまここにあげることもできようか。ほかに、雑誌論文で、趣旨から言って、あるいは関連から言って、全国的視野の研究と、見て見られぬことはないものが、いくらかはある。が、総体には、全国状態についての(あるいは、ふれての)観察・研究、ないし意見は、すくない。

榎垣実氏は、語原隨筆の三著、『猫も杓子も』(関書院、昭35)『江戸のかたきを長崎で』(関書院、昭36)『嫁が君』(東京堂、昭36)を世に送られた。語誌の、いわば全国関係のものとして、これらを、ここにかかげることができる。方言の研究界から、語原研究の本がいく冊も出たことは、特筆されてよく、しかもこれが一人の著者によって発表されたことは、なお大書されてよい。語原研究のおもしろさとむずかしさと、無限の深みとがここで明らかであるにつけても、私どもは、方言「語詞」→「語彙」の研究の重要であること

を、一さわつよく思う。方言の世界から豊富な資料が得られるようになれば、語原研究は進展するであらう。

どの道の研究でも、こと方言にかかわってければ、人は、資料無限の感を深くするはずである。その無限とも思われる資料を整備するのは、方言研究自体である。

柴田武氏編『お国ことばのユーモア』（東京堂）も、三十六年の版行である。これには、「お国ことばのユーモアを求めて」、広く全国から、「ユーモラスな話、219話」が集められている。さきに述べた素材論者の傾向は、一方で、方言事象を、おもしろおかしいものとして点描することにもなりやすい。（また、世の一般人士の、方言事象を変なものの、妙なもの、おもしろおかしいものと見るのを、助長することにもなりやすい。）もしもこういうことがつよければ、方言研究は、容易には、学問の軌道にはのらないであらう。ところで、右の書にのせられた大部分の記事は、あるいは日本語の妙所を端的にえぐって見せてくれ、あるいは日本語の地はだをあらわにして見せてくれる。日本語はこういう言語なのだ、なっとくさせられることが多い。まことに、読んでたのしい本である。

#### 四

全国状態についての、広い見かたの研究がすくないことは、いかにもさびしい。

この種の研究がなくてよいわけではない。作業上、たとえ協同研究・分担研究の方式がとられたとしても、一方では、視点として、全国を一望する視点がなくてはならないことは言うまでもない。方言は一回語の方言である。一回語についての方言研究には、どの段階でか、どの部位でか、かならず、全方言状態を全一的にとらえた研究がある。常識的に言つて、全国状態を一大眺望のもとにとらえた研究がある。

もつとも、これは、容易には実現しがたいことであらう。それゆえ、この種の研究成果も、おのずからすくないのであらう。

山に登つて周囲をより広く見わたすためには、より高い山に登らなくてはならない。方言の全国的な山野を一望のうちにおさめるためには、日本語の方言状態のあいよつて形成している山の、最高の峯に立たなくてはならない。最高の峯に立つことが最善である。

八合目などで全国概観を強行することなどは邪道である。八合目では、八合目であることを弁別した眺めかた、概観のしかたがなされなくてはならない。ところでまた、七合目での見かたと九合目での見かたとを混合することなども、あつてはならない。

こうしてみると、日本語方言状態の全国概観、全国状態を一元的にとらえての概観は、じつに困難なことが明らかである。

しかし、さきにも述べたように、方言研究のじつさいとしては、この困難は克服されなくてはならない。概観は、正確な意味での概論として、樹立されるべきである。

この趣旨のもとで、一・二の所見を述べたい。概論のためには、一つに、資料精選の用意がたいせつである。信用資料による概論構築を考えなくてはならない。あれこれの記事なり素材なりをただよせあつても、全国状態の概論にはならない。（私は、くりかえし、全国状態など、状態ということばをつかつてきた。状態ということばは、状況ということばとは区別している。状態の語は、すでに、体系の状態を意味すべきものとしていのである。それこれの記事のよせあつめによっては、なかなか、状態を描きとることはできない。）

二つに、そのような統一記述のためには、根幹として、記述者の、自身の脚による全国観察が、どうしても必要であると思う。これなくしては、核のある統一記述を実現することは、そもそも無理なものではないか。ここに言う、一人の人の全国観察が、そこそこについ

てのくわしい記述研究である必要は、かならずしもない。全国に対する、生活体験一般での統一的理解がなされるならば、それでよい。この理解が、概論のための資料整備を、よく立体的なものにするであろう。——核心のあるものにするであろう。

一段活用のラ行四段化という現象がある。九州にいちじるしく、関西内にもあり、東北にもまたこれがある。こうした事実を、そこそこの個別記事をたよりにうけとって、やがてとりまとめるとすることになる。一段活用の四段化は東西にあつて全国的だと、概括しうることになる。さて、実情を細見するのに、たとえば九州の四段化状況と、東北の、一段活用の諸活用形の中にみとめられる、いわゆる四段化状況とは、かならずしも、同日には論ぜられないかのようにである。事實は両方にあるのだけれども、ありようなり、「見ラ」などの、聞こえてくるつよさでも言えるものなりは、双方で、いくらかちがうようである。つまり双方では、四段化という事態の存立状況が、ちがうと言えるかのようなのである。このような様子を見ていると、全国状態を概括的に言うことのむずかしさが痛感される。このむずかしさをきり開いていくがためには、やはり、研究者が、それらの土地があるき、それらの事情をよく体験してみなくてはなるまい。概論のためには、すくなくとも、そういうことを重視する根本

態度がいると思う。

## 五

全国的な概論について、なお一つのことを考えておきたい。

たとえば一県下の地域の概況を述べようとして、代表の一点に立脚しようとするところがある。このやりかたでいけば、全国概論のためにも、また、特定の少地点による方法がとられることになる。

方法としては、このいきかたも、たしかに可能であり、正当でもある。小地点・小地域から大地域を論じることは、なされてよく、有効でもある。厳密に言えば、そうするよりほかはないことも、すくなくないはずである。ただ、ここにだじじなのは、その一即多、小即大の展開が、論者自身において、論理的でなくてはならないということである。条理立てられてはならないということである。一をもつて（一から）多を言うことが、ただの気ままであつてはならない。

こういう、むずかしい要求に応じるためにも、研究者は、基礎的処置として、当の問題領域を、一わたりあるいてみることにつとめるべきであろう。